

タイトル	W.B. イェイツ作 『アシーンの彷徨』 1889
著者	川上, 武志; KAWAKAMI, Takeshi
引用	北海学園大学人文論集(51): 242(1)-187 (56)
発行日	2012-03-30

# アシーンの彷徨 一八八九

W・B・イエイツ 作  
川上武志 訳

「どうか この世界をわれに与え、わが情愛のための  
隠れ家を下さらぬか。」——ツールカ

エドウィン J・エリスへ

## 一 の 書

聖パトリック いまや 腰も曲がり、頭も禿げ、盲目の姿となり、

切ない思いと さすらいの性根をした お前は、

詩人達も歌っておるが、悪霊なるものとの戯れに過ぎた

三世紀にも渡る歳月を 知っていると云うことだが。

アシーン 過ぐる歳月が込み上げて、思い出すも悲しいことは、

あの素速く放たれる数え切れぬ槍のこと、

髪を靡かせて駆ける騎馬武者達のこと、

麦酒や蜜酒や葡萄酒が注がれた何杯もの大盃のことや、

調べにあわせて踊るあの陽気な男女のこと、

私の横に侍るあの白い肌理はだをした女のこと。

だが、言葉なるもの 空気ほどに軽いとはいえず、この話は

さすらう月のごとく 未長く残ることになろう。

そこに居たのは、キールタとコナン(二)、それと父フィン。

ブラン、スキョーランとロメエア(三)が吠え立て、

私達が 鹿を追っているときであった。

フィルボルグ族(四)の墳墓を通り過ぎて、

いまは石のように静かな 勝気なメイヴ女王(四)の

ケルンが積まれた草深い丘へと やって来たときである。

鳩羽色の海の縁で ふと出会ったのは、

白銅の馬勒をつけた馬に跨った、

真珠色の肌をした高貴な生まれの姫であった。

そして、その唇は 夕日のようにであり、

不運な船団を襲う 嵐を孕む夕日さながらであった。

髪はほの暗い淡黄色うすきをしており、

刺繡しすい模様がたくさん施されて 深紅色に仄かに輝く

白い衣は、その足元にまで靡ないでいた。

その衣は 彼女の柔らかい胸が上下するたびに

夏の潮の流れのように揺れ動く

真珠色をした一つの貝殻によって 留められていた。

聖パトリック お前ははまだ異教の夢に酔うておるな。

アシーン 「なぜ 角笛を吹かないのです？」と彼女は云った。

「英雄の方々が皆 うな垂なれているのはどうして？

安穩やすんな瞬間とき何度となく過すごした

あの角のない鹿五でも こんなに悲しくはありませんわ。

それに どんな穀物倉の鼠よりも 毛に艶つやがありますもの。

羊齒しだが風になびく野辺にある、葉の茂った

自分の森の住み処かにいるのですから。

英雄の狩りは もっと楽しいはずですわ。」

「おお 陽気おほせな女よ」とフィン六は答えた、

「我等は筋模様の入ったオスカー六の骨壺しほを唄うたんでいたのだ。

鳥に覆いつくされたガウラの戦場で

斃れていった英雄達のこともな。

して そなたの高貴な親御はどこにおられるのだ。

それに そなたはどの国から参られたのか？」

「私の父と 私の母の名は

アンガスとエードンと申します。

この私の名はニアヴ、そして、私の国は

逆巻くこの潮の遥か彼方にあります。」

「そなたは 一体どんな夢をみて 泡立つ海に足を濡らし

馬に跨がり、憂い潮のなかをやってきたというのか？

それとも 連れのお方が アンガスの鳥が

羽ばたく国から 出奔したとでもいうのかな？」

そういうと 彼女は気高くも 愛らしく、

「私には いまだ、戦に疲れた王よ、

どんな殿御とのお話などご座いませんわ。

でも、いま 分かったのです。と申しますのも、

この四足と泡立つ海を抜けて 此処に参りましたのは、

あなたの御子息に 接吻して頂くためだったのです。」

「泡立つ海をことごとく駆け巡っても そなたには  
我が息子より 相応しき者はおられなかったのか？」

「私には どんな殿御も、たとえ王様達に請われても、  
ダナン<sup>(九)</sup>族の詩人が名高いアシーン殿を詠み込んだ  
詩をうたうまで、愛せなかつたのです。

いま 私は目も眩まんばかりです。

アシーン殿の手が打ち破つた幾多の戦で揮われた、  
あの知略や名譽のお話のことや、

雨気のない国々で 夕間暮れに群れ集う

東洋の鳥のような極彩色の言葉で

語られる お話のことを考えると。」

おお パトリックよ、おぬしの真鍮の鐘に誓つて、  
私のこの身は 命がけの恋の

深みに落ちるほかはなかつたのだ！

「あなたとなら結婚しても構わない。」と、私は叫んだ。

「そして 私は数えられないほどの歌を拵<sup>こしら</sup>えて、

あまたの名声にもまして あなたの名声を称え、  
西方にある私の居城で 日が暮れ落ちる頃に  
皮紐で括られた虜囚を 一人ずつ跪かせて  
あなたのことを 賛美させましょう。」

「ああ アシーン、私の馬に一緒にお乗りになって、  
寄せる潮に洗われる 浜辺へと向かいましょう。  
そこは 人々が墳墓を積み上げたこともなく、  
日々が 移り気な調べのように 過ぎ行くところ。  
誓いが けして破られたこともなく、  
初恋の頬の紅が けして消えたこともないところ。  
そこで、私はあなたに百頭もの獵犬を差上げましょう。  
月に これほど遅く吠える生き物もおりませんわ。  
そして さらにと絹擦れの音がする百着もの衣も、  
また 百頭もの子牛と 海の泡よりも白い  
ふわりとした長い毛の百頭もの羊も、  
そして 百本の槍と百本の弓も、  
また 油と葡萄酒と蜂蜜と牛乳も、  
そのうえ 常に心地よい安眠も差上げましょう。  
また 騒ぎも憎しみも争いも知らないけれど、

堂々たる体軀からだをした 百人もの若者と、

むら気な調べにあわせて踊るとき

群れる鯉が泳ぐように素早く動き、

その陽気なさまは鳥のような 百人の嬢子も。この者達は

あなたの角笛のままに従い、その気紛れにも服すでしょう。

また あなたにダナン族の逸楽を味合わせてあげますわ。

そして このニイアブはあなたの妻として暮すのです。」

それから 彼女は優しく溜息をついて「遅くなりますわ。

白い月が昇り 赤い太陽が沈み行き、世界がほの暗くなるとき、

音楽と愛と眠りとが待っています。そこから私は来たのです。」

そして それから 私が馬に乗ると 彼女は

恋を制したその腕を回し 私を強く抱いて、

思わず囁きを漏らしながら その身を絡ませた。

すると 馬が私の重みを感じたのか、

その体を振るわせ 三度 いな嘶いた。

キールタとコナン、それにフィンも傍にやって来て、

泣きながら 悲しみのあまり双手を挙げ、

しとど 涙を流しながら 私に行くなと命じた。

だが 私達は馬を御して 人間の住む地を抜け出したのだ。



盾と弓を携えて おまえ達は どんな遠くの王国へと

出かけているのだ？ ああ フィニアン達よ、

それとも この上なく命に溢れた赤い唇をした

おまえ達は 雪のような白い亡霊となっているのか？

おお おまえ達と 私は 朝方に 急坂になった

溪谷や、露に濡れた森の小道を辿って、

飛び跳ねる鹿を追ったこともあった。

おまえ達と共に 槍を素早く投げつけ、

敵の丸盾が かたかたと鳴る音を聞き、

喘ぐ軍勢を蹴散らしたこともあったのに！

それに ブラン、スキョーランとロメエアよ、

長く固い毛並みのおまえ達は 一体どこにいるのだ？

おまえ達は 赤鹿が草を食むところに行くことも、

敵兵を軍馬から引き摺り落とすこともないのか。

聖バトリック 驕らぬことだ。うな垂れて、嘆くではないぞ。

何世紀も前に 灰と化して大気に消え 長く呪われた

死せる輩ともがらや 獵犬ともがらどものことを。

アシーン 私達の馬は びかびかと輝く海上を疾駆した。

どれほどの日と時間が過ぎたのか 私には分からない。

ニイアブは絶えずダナーンの曲を歌い、人間のものと思われぬ  
哀愁に満ちながらも心嬉しい調べを 露のように注いで、  
倦勞を紛らせてくれた。そして その白い腕で

私が抱く人間の悲しみを そつと柔らかく包み込んでくれた。  
私達は駆けた。そのとき 一頭の角のない鹿が

私達の脇を通り過ぎた。その鹿は 片方の赤い耳を除いては  
全身が真珠色の 亡霊となった獵犬に追われていた。

そして 次に 淑女が一人 風のように馬でやって来たが、  
振り上げられた手に 黄金の林檎りんごをもっていた。

さらに 抑えきれない眼差しを向け 髪をたなびかせた  
一人の美しい青年が その後を追っていた。

「あの二人は ダナーンの国の生まれの者なのか、  
それとも 現世の空気を吸っている者なのか？」

「あの者達には 構わないで。」とニイアブは云って、  
溜息をつきながら その温和な頭を垂れ、

またも溜息をつきながら 私の唇に  
その真珠のような長い指先を当てた。

さて いまや 白薔薇のような月が

青白い西の空を照らし、太陽の縁が沈みゆくなかで、

その薄れゆく紅の球体のあたりに、

雲が 列をなすように 重なり合っていた。

アルウイン（千二）の岡に立つ集いの広間といえども

その海面よりも平らではなかった。

情愛あふれる幻想に浸りながら、

海の低い眩きのなかを 私達は馬を進めていった。

そこでは 数々の喇叭のような巻貝が

永遠の静寂のなかに眠り込んで、それらが水に融かした

黄金や琥珀や群青の色彩のことを夢見ながら

その浅瀬を 柔らかな光で貫いていた。

さて いまや さすらう一陣の陸風があり、

遠くから 鳥の唱和する声が聞こえてきた。

風は 消えかかる炎から吹いているようであり、

鳥は 燻ぶる火のなかで歌っているように思われた。

馬は 人気のない荒地のなかで嘶いて、

その鳥の楽の音のほうに向かって駆け出した。

煤けた指のように その暖かい海面から

何本もの樹木が 次々と その姿を現した。

それらは 絶え間なく揺らいでいて、  
そのさまは 太陽がぎらつくなかで、  
あの低く巧笑するような森の調べに合わせて、  
拍子をとっているかのようであった。  
いまや 私達の流浪の時間も 終わりを告げた。  
馬をゆっくりと駆けさせ その浜辺に行ってみると、  
樹々が震えている理由がわかった。  
枝という枝に 歌鳥が飛び回っていて、  
群がる蜂のように そこに纏わりついていたのだ。  
一方、その浜辺の周りも 凍った虹の光りが  
滴たるように 無数の鳥に溢れていた。  
鳥は潮のうえに映った己の影のことを  
それとなく 徒な気分<sup>あた</sup>で思案し、  
深紅色のわたつみに その矜持を語りながら、  
喜ばしい鳴声を 一頻り交わすのだった。  
また どの岸辺にも 鱸から舐へとした  
たくさんの船が浮かんでいて、  
それぞれの船首には 鷺や魚を食らう貂<sup>てん</sup>や  
歓喜して首を伸ばす白鳥の彫り物がされていた。  
そして 森と海とが接するところ、

葉の繁る木立に 私達はその馬を繋ぐと、  
ニイアブは 小さな銀の喇叭で  
陽気な調べを 三度 奏でた。  
すると、それに答えるかのような囁き声が  
剥き出しの林地から こちらへと伝わってきた。  
足が立てる 激しいざわざわとした音が、  
だんだんと近くに聞こえるようになり、  
森から 一団の男子と嬢子が、  
手に手を取って 皆で一斉に歌を  
うたいながら 勢いよく飛び出してきた。  
彼等の額は 香り立つ牛乳のように白く、  
その外套は 黄色の絹で織られており、  
たくさんの深紅の羽飾りで縁取られていた。  
そして 私の着ている外套が、現世の浜の  
泥にくすんでいるのに 気がつくくと、  
それを指で触り、まじまじと 私を見て、  
海の眩きのような 笑い声を上げたのである。  
しかし ニイアブは 直に困った様子を浮かべ、  
彼等に私から離れて 静かにするように命じた。  
すると 彼等がその声を聞くと 走り寄ってきて

その場に跪いた。そして 男女のことごとくが、  
止むことがないほど 彼女の真珠色の青ぎめた手と  
着物の裾に 接吻したのである。

彼女は彼等に広間に案内するように命じた。

そこは 来る年も来る年も 島主のアンガスが

星も衰え この世が果てるときに迎える 終末の日の夢を、

ドルイドの夢を結んでいるところであった。

彼等が私達を案内してくれた 影なす長い道辺には

無数の露の雫が 滴り落ちていて、

絡み合った蔓は 次から次へと

真新しい真紅の花を咲かせていた。

すると、突然 笑い声が 彼等の唇から同時に

湧き上がり、一斉に 朗唱し始めた。

その間じゅう その歌は 暗い森に鳴り響き、

その奥の至るところにまで伝わって、

蜜を集める蜂の羽音と協和しながら、

喜びの籠った心情がたてる 密めくような音となった。

そして あるとき 私のそばにいた 一人の嬢子が

私に豎琴を差し出し、歌うよう また、

笑いを誘う銀の弦を 爪弾くようにと命じた。

ところが 私が 人間の喜びの歌をうたったとき、

陽気な顔という顔が 一瞬 悲しみに包まれ、

パトリックよ！ おぬしの髭に誓って云う、彼等は泣いたのだ。

すると 涙を湛えた一人の少年がやってきて、

「人間の吟遊詩人とは不思議なもの。このような

悲しい者は 一度も来たことはない。」と彼は叫んだ。

そして その銀の竖琴を 掴み取ると、

白い弦にすすり泣きながら、それを

ほの暗い水面を空から隠している

葉で囲われた虚空に ほうり捨てたのだ。

そして 各々は 長々と溜息をつきながら、こう云った、

「おお すべての世にある この上もない悲しい竖琴よ、

月と星々が消滅するまで そこに眠っておれ！」

さて いまや 悲しみのままに 私達がやって来たのは、

一人の美しい若者が 網枝と土塊つちくれと毛皮とでできた

住家のなかで 夢見るところであった。

片方の手で 自分の髭のない顎を支え

もう一方の手に 握られていた笏は、

赤と金と青の炎の輝きを放っていた。

そのさまは大気を飛び跳ねる踊り子の一団が  
陽気に乱舞するかのようにであった。

そして 男子と嬢子らは そこに跪いて、

その目に 臙げな涙を浮かべながら、

低い呟き声で 彼に祈りを奉げた。

また その笏に 赤い唇で接吻をし、

その指先で 笏に触れるのであった。

彼は その煌めく笏を差し上げた。

「喜びこそが、露のなかに 黄昏たそがれを浸し、

夜という華麗な杯を 星々で満たし、

怠惰な麦の種を 目覚めさせ、

生えかけた子山羊の角を 伸ばし、

羊歯の小さな葉先を 弛ゆるませ、

田たけり堯の頭頂を 色づかせ、

巨大な日輪を 巡り廻らせ、

小さな惑星を 運行させるのだ。

そして もし 喜びが 地上に無くなれば、

変化と生誕も終わりとなろう。



「地上」と「天国」と「地獄」も無くなり、  
凍った羽虫のように 薄暗い塚のなかに  
閉じ込められることになるであろう。

されば 瞳を凝らし 腕を揺らし  
さすらい舞って「死」と「時間」を嘲るがよい。

古人いにしへのひとの心は サフラン色の朝から

やって来る炎の滴りであり、

巻貝のような青白い月から落ちる

銀色をした 喜びの滴りであつた。

いまや その身が奴隸であることを嘆く心は、  
狭い洞窟のなかで 甞もてあそばれているではないか。

だが、ここには 法も規則もなく、

両手が疲れるほど 道具を握ることもない。

そして ここには 変化も死もなく

ただ優しく陽気な息吹があるばかり。

それは 喜びが神であり、神が喜びであるからだ。」

その少年少女と 青白い花のような月に

彼は 長い一瞥を与えると、

ドルイドの昏睡ねむりに 落ち入った。

それから 私達は「時」と「運命」と「偶然」を  
蔑んで 突然 激しく踊り始めた。

そして その網枝の館を 急ぎ飛び出して、

露の滴りが 海の泡の雫のなかに

落ちるところへとやって来た。

そこで 私達は その賑々しい気分を 鎮めたのだ。

そして 私達の額の眉を寄せて、

揺れる体を めいめいが折り曲げ、

あの坂なす緑のデ・ダナーンの芝草のそばで、

きらきらと輝く 漣にあわせて、

こう歌った、「神は喜び、喜びは神なり、

そして 悲しくなりし事は 邪まなり、

明日の暁や 灰色のさ迷う鸚の悲哀を

気遣う事も また邪まなり。」

私達は踊りながら 曲がりくねった茂みのなかで、

薄紅の薔薇が咲き誇り、真赤な彗星のように

暗がりに 撓垂れているところに やって来た。

そして、その花に屈みこんで 優しくこう云った。

踊りながらも その花に屈んで、

涙に濡れた眼から 俊敏<sup>すばやか</sup>い親しみのこもった  
視線を注いで、「死せる者の上には

他の薔薇が その花びらを散らすもの。

死せる者は 臃<sup>ぼろ</sup>げな土に 覆<sup>お</sup>われるもの。

だが きらきら光る浪のそばに造られた

私達の墳墓には けして けして、

淡紅色の薔薇の花びらを 散らさぬよう。

それは 私達には「死」も「変化」も近寄らず、

一切の物憂い時のほうが 私達を気遣うのであり、

開けゆく朝も 灰色のさ迷う鸚<sup>か</sup>の悲哀も、

私達は気遣うことがないので。」

その踊りは 風のない森へと

永遠の夏の孤独へと うねって進んでいった。

そして ついに 森の中央にある丘の上で

振り上げられていた腕が 静まった。

そして 息を切らしつつ 一団となった

私達は 両<sup>かひな</sup>の腕<sup>うで</sup>を 高く投げ上げて、

星屑にむかって 歌をうたったのだ。

私達の見上げた眸<sup>まぶた</sup>の ここそこに

乳白色の明るい輝きが煌めくなか、

このような歌声が立ち昇った。「星々よ、

お前達のさ迷える真紅の戦車の上でゆるやかに

その手綱を振れ。神の奴隸であるお前達よ、

神は 鉄の棒で お前達を支配し、

神は 鉄の鎖で お前達を結えつけている。

一つの星がもう一つの星に繋がられ、

凍った池のなかの気泡のように

各々がその伴類に繋がれている。

だが、私達は 臃げな潮のように

自由気儘に 孤島に暮らしている。

法も規則も知らぬ心根で、

疲れるほど 両手に道具を握ることもなく、

明日のことも、灰色のさ迷う鶉の悲哀のことも

気遣うことのない愛に 包まれて。」

おお パトリックよ！ 百年もの間

私は あの樹々の生い繁る岸辺のうえで

鹿や穴熊や猪を追いかけたのだ。

おお パトリックよ！ 百年もの間

きらきら光る砂浜の夕べに、  
積み重ねられた狩猟の槍のそばで、  
今は窶<sup>やつ</sup>れしなびたこの両手で  
島の者との組み打ちに興じてきた。

おお。パトリックよ！ 百年もの間

私達は 鱸から舳までになった 長い船に乗って  
魚釣りに出かけた。それぞれの船首に

鷺や魚を食らっている貂の

彫り物がされている船で。

おお。パトリックよ！ 百年もの間

あの優しいニイアブは 私の妻であったのだ。

しかし いまや 二つのものが 私の命を貪る。

それは とりわけ私が嫌うもの、

断食と祈りだ。

聖パトリック

語り続けよ。

アシーン

そう、そうなのだ、

この二つのものが 遥か昔に天国の門から見離され、  
残された最後の日々を過ごすだけの

老いたアシーンの負う運命となったのだ。  
ある日のこと 私が上げ潮の汀に佇んで、  
夢のように泡立つ海に われ忘れていると、  
どこかで斃れた戦士の 折れた槍の  
木でできている柄のところを 見つけた。  
私は 手にもってそれを返してみると、  
戦の血の痕がついていたので、私には涙が溢れてきた。  
フィニアン達が 好運なときも悲運なときも  
変わることもなく、血が撥ね返る平原を どのように  
その歩を進めたかを思い出したからだ。  
すると 若いニイアブが そつとやって来て、  
何も云わずに、私の手を握った。  
ただ おびえた鳥のように 眩き声で、  
私の名を 幾度も口にするだけであった。  
私達は森のそばを抜け つめ草の生える野を通ると、  
あの馬が見つかったので、手綱をつけた。  
私達は得心していた、この暮らしが終わったことを。  
私には こんな声が聞こえてきた、「彼の目は  
人間の古の愁いを含んで 朧げになっている。」  
そして 夢に包まれて、再び馬に跨った。

淡い白銅でできた轡を御する駿馬の蹄で、  
きらきらと輝く紅の海を渡るために。

黄金色に映える夕べの光の下に、

不死なる者が、川沿いの泉のなかや

古い夜の森のなかに 蠢うごめいていた。

山中で 影のように踊る者もおり、

手に手を取って 絶えず迷っている者もいた。

あるいは 青白い岸辺に 夢見ながら座り、

ぼやけた星のような額を それぞれ

折り曲げられた膝の上に乗せ、

歌をうたっている者がいた。その夢見るような眼差しで、

サフラン色に燃える太陽が その海道で

半ばまどろんでいる辺りを 眺めていた。

そして 彼等が歌っていると、色鮮やかな鳥達が

光沢のある羽と足とで 調子を取った。

その歌声は 蜂蜜の滴りのように聞こえ、

若い子羊の鳴き声よりも 微かであった。

「二人の老人が 子供、友達、兄弟の家で、  
炉火を掻き回し 炎を起す。

老人への持て成しは 長すぎたのだ。

悲惨となった日々は 互いに囁き溜息をつく。

老人は 煙突の上から 嵐の音が聞こえてくると、

炬火に屈み込んで、寒さにその身を震わせる。

一方、その心は いぜん 戦いと愛と

古の丘に響く獵犬の鳴き声の 夢に耽<sup>かた</sup>っている。

だが 私達は草深き場所に 護られている。

そこでは 日々が 些かも煩わされることがなく、

青春の穏やかさが その顔から消えることもなく、

初恋の優しさも その眼から消えることもない。

野兔が 陽光のなかで遊び 老いてゆき、

明るい瞳で 周りをじつと眺めやる。

兎は素早い動きを夢見るが、それも終わらぬうちに、

年を取って白くなり、足を引きずるようになる。

空中を羽ばたきながら チューリップのように

東洋の木々に止まる 鳥の大群と、

波頭をもたげて さ迷い歌う

夏の海の穏やかな浪は、ついに

眩くに違いない、『不当だ、不当だ』と。



そして『はやく動く疲れ』と鼠は挫け、  
川蝉は 芥あぐたの玉のようになり、  
その掘られた巢の天井は 崩れ落ちる。  
だが 私達の目を 愛の露が 霞ませるのだ。  
神が 溜息をつきながら 海からやって来て、  
星々に 空から落ちるよう、青白い薔薇のような月が  
萎れるようにと 命じるその日まで。」

## 二の書

さて、笏しやく杖を持つ人よ、亡霊が私達の名を呼ぶと、  
渦巻く炎のように どんどんと離れて行った。  
そして 今度は 霧に覆われて 音もなく  
あの若者と嬢子と、あの鹿と猟犬とが 飛ぶように過ぎていった。  
「もう 亡霊達を 見詰めないで。」と、ニイアブは云った。  
それから 私の目に接吻をして、その金髪の頭と  
体を朗らかに揺らして、神もまだ存在せず、古い私の家系も  
始まる前の 妖精と人間の歌をうたった。  
影残す壮大で熱狂的な戦の歌や、ドルイドの金の指輪を  
嵌めた人間に嫁いだ 昔の妖精の歌を。  
また かの恋人達が その眼を けして

弱まって揺らめき消えていく命には 向けることなく、  
溜息のような飛沫の楽の音が響く 遠く離れた朧げな浜辺の上で  
愛しい接吻を交わす歌をうたった。  
しかし 十分に蜜を吸った茶色の蜜蜂がそうであるように、  
この日から数えて百年前に その白い腕を私に廻して、  
霧立ちこめる海を渡ったときのように 歌わなかった。  
というのは いま 涙がはらはらと落ちてきて  
歌えなくなったのだ。

どのくらいの日と時間が

過ぎたのかは 私には分からないが、彼女の髪に編込まれた  
煌めく花々のあいだに 輝く朝の光線が  
何度も差し込んだのを覚えている。すると 何本もの黒い塔が  
闇のなかに立ち現れた。そのまわりには 寄せる白波が  
輝いていた。そこで 妖精の馬は「恐怖に満つる島」と  
勘づいて、高く嘶き 体を震わせた。  
色白のニイアブが その耳を撫でて 優しく何度もその名を  
呼ぶまで 馬は震えを止めなかった。

泡立つ潮が、

遠くで白い波頭を蹴立て、扇形に広がっていたものが、  
一度に大きな扉からどっと流れてきた。その扉には 遠い昔

神と巨人が戦ったときの 鉾や刀や長柄の斧による  
傷がたくさん残っていた。私達は 海草で  
覆われた列柱の間を 馬で通り抜けた。緑色で  
揺らめく燐光だけが 私達の暗い行く手を  
照らしていたが、そこに 月光を浴びた無数に連なる階段が  
ぼんやりと現われた。そして 左右に置かれている  
二体の黒い彫像(十五)が、青白い潮に洗われた黒い玉座の上で  
かすかに光った。一体の像の脇の間には  
ぱつと閃いて流れ落ち 静かな漆黒のなかで  
遊び興じるたくさんの彗星が 映し出されていた。  
神が「時」と「死」と「眠り」を創ったとき以来、  
現れては 輝き 沈んでいった恒星もそこにあった。もう一体は  
その長い腕を 立ち込める水煙の流れが  
ぐるぐると渦巻くところに伸ばしていた。——その唇は開かれ、  
まるで 像が けして微睡まどろむことのないその心に、  
縁なき泡沫えんなきうたかたの行方ゆくえのことを 物語ものがたりっているようであった。  
船影も見えぬ海に半ば浸かっている 像の巨大な足下に  
馬を繋ぎ、私達はその長々とした階段を  
登っていった。私には 最後の数段が 明けの明星から  
吊るされているように思われた。そのとき 次の柔らかな言葉が

鳥の羽のように 喜ばしく 大気をそよがせた。

「私の兄弟は 明け方に 若い山鶉のように眩きながら、  
寝床から飛び起きます。よく響く角笛を手に、  
真昼まで 彼等は鹿狩をいたします。

そして 露に浸された星が 空に懸かるとき

長い釣糸を繕ったり、猟の槍を作るために

<sup>とねりこ</sup> 樗の木の皮を剥いて 穂先を尖らせたりします。

ああ 溜息よ、震える溜息よ、私に優しくしておくれ。

お前は 海の泡の唇を 震わせなさい。

そうすると 海の泡の唇が 浜辺を濡らすでしょう。

そこに 暫らく留まって 泣くようにと伝えなさい。

ああ もしそれらが眠るなら、血脈で青くなつた

目蓋まぶたに触つて、その覆いを揺すつておあげなさい。

お前が 私がとどめなく泣くさまを語るとき、

海の泡の唇のところを 震わせて、

私のところに また戻つておいで。

そして 私の髪の影に 隠れて、

私に語つておくれ。招かれざる男が、

全ての男のなかで最も悲しい者が 見つかったと。」

甲いに灯す蠟燭のような 柔和な目をした娘子、

月光に照らされた霞から出来ているような顔をし、

赤い蛾のように 恐怖で微かに震えている

悲しい口元をした 一人の娘が 私達を見下ろしていた。

そして 彼女は 波で錆びた鎖によって

古の矜持に溢れた二羽の年老いた鷲に 繋がれていた。

うつろな眼球をし その両側に立っているその鷲の

ぼさぼさした翼には ほとんど羽毛が無かった。それは

その臙げな想いを 昔の諸々もろもろに向けていたからである。

「私が解放してあげる。」真珠色をしたニイアブは云った。

「生者も 苦しむことのない死者も、

露命なき高位の神々も、この私の敵に

戦いを挑むことなど望むべくもありません。悪鬼どもも驚いて

夜にもなると あいつの周りで きゃつきゃつと叫びます。

というのは あいつは 「七本の榛の樹」(千六)の下から

噴き出す海のように 力強く悪賢いのです。

だから 私は ただ耐え、嫌い、泣くばかりなのです。

エイ(千七)の奏でる悲しげな黄金の弦の調べを聞いて、

神々と悪鬼とが 眠りに落ちるまで。」

「そいつは そんなにも恐ろしいのですか?」

「大胆も 過ぎるのはいけません。」

できれば 早く逃げることです。」

それに答えて 私は云った、

「その悪鬼を 死ぬまで 殴りつけて、

その弛たるんだ巨体を 高鳴る潮の中に捨ててやる。」

「それからは 逃げて。」真珠色のニイアブは 泣きながら叫んだ。

「どんな人も 悪鬼からは逃げますもの。」だが 王の振舞を想う

私の怒れる心は 些かも 動かされることはなかった。

ヒーバキバアの家系には かくも勇ましい男はいなかった。

いまとなつては 老いた鼠も同然であるが。その証あかしとして

私はその鎖を断ち切った。耳持たぬ、無気力で、盲目のままの

二羽の鷲は 人間ならぬ諸々の想いに捉われていた。

ある臙げな記憶か あるいは古の気分きぶんに浸りながら、

なおも 耳持たぬ、無気力で、盲目のままに 鷲は佇んでいた。

それから 私達は高みにある扉にむかつて その階段を登っていった。

下の玄武岩の床は 以前に 百人もの騎手が  
満足げに 隊伍を進めたところであった。私達は 行く手を確保し  
中に入り込んだ。ぼやけた光線に包まれて、私が見たのは  
天井の下に漂い浮かんでいる 海の泡のように白い  
一羽の鷗(千九)であった。私は それに向って 喉を張詰め  
大声で叫んでみた。その鳥は そこに 星のように浮んでいたが、  
どんな人の声も そこまでは達することはないだろう。  
その館を倒壊することは おぬしの神でさえ叶わぬこと。  
その自在に操る稲妻を わざわざ舎房に繋ぎとめて、  
おぬしの神なぞは まるで最後が来たとばかりに  
座り込んで 心悩ませて 嘆息するだけだったろう。

私達は その扉から

いちばん離れた場所を探した。緑の ぬめりが  
道を滑りやすくしていたが、海の生き物である  
鱗の跡が ひんぱんに見つかった。そこを降くだる  
その女囚の通り路は 小川のような線を  
前や後ろに描いていた。足の触れるところには  
一瞬 炎のような燐の煌きが上がった。  
その館のなかで最も濃い影のところ、

その女は<sup>(二七)</sup> 壁に懸かっている輪と、

その輪のなかに松明を見つけた。その揺らめく炎は、彼女の周りの大気を明るく浮き立たせた。

そして ほの暗い戸口をくぐって、姿を消したが、彼女の指の間に二つ目の灯火を持って

再び現れたかとおもうと、私の手にそれを置いて

溜息をついたのである。私は その輝きが

何世紀も陰ることのない剣、オガム文字で<sup>(二七)</sup>

海神「マナナーン」<sup>(二七)</sup>と刻まれた剣を掴んだ。

この海神こそが すっかり満足したあげく

滴を垂らしながら立ち上がって、七重の海から送り込まれた

手下の悪鬼どもと、泡と雲とを土台とした

あの暗い館を打建てたのだ。そして 力強い種族のなかの

とびきり力強い首領達をことごとく呼び出した。

すると その叫び声で そこに現れたのは 茨の冠を被った

黒く血を流した 乳白色の青白い顔<sup>(二七)</sup>の者ではなく、

いづれも歓喜した面々ばかりであったのだ。

ニイアブは

俯いたままで、白い刃の輝きに 震えていた。

優しく振舞う時でもないので 希望も恐怖も 彼女が



抱くことはなかった。私は二人に 影になったところに  
隠れているように命じた。というのも 激しい衝突と  
大地を揺すぶる戦いの喧騒が終わるまで、この二人に  
その恐ろしい光景を 見せたくなかったのである。  
それから ねばねばする敷石の間に 松明を差し込んだ。  
影と影とが作り出す面が 互いに交錯し合う  
無数のぎざぎざの石の突起でできた 丸天井が、  
私をじっと見下ろしていた。そして、そのところで  
私は何時間も待ちつづけた。窓も柱もなく 無数の面を  
作り出している その高い丸天井の下で ひたすら待ち受けた。  
私の凝視に余裕が生じ 埋もれた力強い時代の  
記憶が蘇えてきた。あの巨大な扉から  
曙の光が差し込んできて、青白い光で その床を  
微かに照らし出した。その館を 私ぐるりと巡ってみると、  
壁に深く埋め込まれた戸口を それも極小のものが  
見つかった。その向こうには 細い小川が  
朧げな野に さらさらと流れていた。  
その小川の 石が剥き出しになった縁のところ、  
萎れた菅のように干からびた 浅黒い悪鬼が一匹、  
不明な言葉で口遊さみながら、体を揺すっていたのだ。

わびしい享楽に耽けり 浮かれつつも 陰気に歌いながら  
体をぶらつかせ、まるで 花々がいまも  
そこに咲いているかのよう 小川のわきで  
その手を前後に動かしていた。彼方の 揺れうねる  
大海原では、蒸気と蒸気とが激しく絡み合っていて、  
他方、高みの儂い片雲は 緑の光を浴びながら、  
吹き溜まりの葉のように 燃える暁のなかに動きもせず  
輝いて 浮かんでいた。そいつは ゆっくりと振り向いた。  
悪鬼の余裕をもって。初め白かった両眼は、いまや 翡翠の  
羽のように燃え盛り、そいつは 立ち上がって  
唸り声をあげた。刀と真鍮の戦斧を互いに振るい合って  
私達が 上や下へと踏みしだくうちに、  
朝が白昼となり、昼が夜へと代わっていった。  
そして そいつは 夜の物陰のなかで、私の太刀が  
マナナンの剣と判ると、あまたの姿に変身させながら  
逃走したのである。私は 大鰻の柔らかな喉に  
刀を突き刺すと、そいつは 変身した。私は  
葉のない梢を騒がす 樅の木にも強打した。  
そして それから 私の胸元のところにまで  
溺れて水滴を垂らす青黒い顎を 手繰り寄せた。

次々と恐怖が湧いてきた。西の空が羽毛の火となって押し寄せたときに、私は 漸く やつの心臓と背骨に刀を突き立てた。そして ニイアブが身震いしないよう、そいつを 波間に投げ捨てたのである。

希望と恐怖で一杯の

あの二人が 葡萄酒と肉とパンとを運んできた。  
デ・ダナーンのさる神殿で 白い蛾を育てている花から作られた軟膏で 二人は私の傷を癒してくれた。  
それから 朧げな海の輝きに照らされた あの館で、私達は 川瀬の毛皮の上に横たわった。  
そして 海神達が醸した葡萄酒を、その盛時さかりどきにその唇に運ばれた巨大な杯で 酌み交わした。  
それから 積み重ねた川瀬の毛皮の上で 眠りについた。  
サフラン色の太陽が もう一度 わだつみの中から 燃え盛る車輪を回しながら その歩みを始めた。  
私達は 眠りも忘れて 愛や 静まることのない怒りや強者の熱狂的な試練の歌をうたった。  
だが いまは 嘘つきの聖職者どもが 不毛な言葉と

弱者に使う世辞によって 歌をぶち壊しているではないか。

いかなる国において 無力の者が 漁る「悲哀」の嘴くちばしや  
「憤怒」の拳を 揮えるというのか？

すべておぬしの笏杖のせいだ 彼等は道から外れ、

嵐と纏わりつく雪のなかを 希望もなく永遠に

さ迷っている。老いたアシーンには解っているのだ。

それというのも その身は 弱く貧しく盲目となり、

この世の深い情けに 絶すがるだけなのだから。

### 聖バトリック

静かにせい。空が

雷と稲妻と猛烈な風で 息も絶え絶えになっておる。

神がお聞きになられて、怒りの御心を語っておられるからだ。

お前の体を 石の上に投げ出して 祈るのだ。それというのも

神こそが真夜中と暁と昼間をお創りになられたからだ。

アシーン 聖者よ、泣いているのか？ 私には この雷鳴のなかに

フィニアンの馬の嘶き、砕け散る鎧の音、笑いと叫び声が

聞こえるのだ。軍勢が激しい音を立てて 衝突し、

いまや 昼をも暗くするほどの 鳥が群れている。

鳴止むのだ、おお 悲しくも笑む音のするフィニアンの角笛よ！

私達は三日に渡って宴を張った。四日目の朝に

私は あの広い階段のところで、だらりとし 執拗な

あの悪鬼に出くわした。海の泡を滴らせ、ぬめりに塗れ

髪をたらし ぶつぶつ言っている悪鬼に。

そして もう一度 丸一日の戦いが始まった。

日没のとき 大波のなかに そやつを投げ込み、

四日目の朝に やつの新たに癒えた姿が現れるまで

待ち構えた。そして 百年にも渡り

そのように戦い そのように宴を催した。夢も恐れもなく

倦怠も疲労もないままに、果てしない宴と

果てしない戦が続いた。

その百年が終わった。

私はあの階段の上に立っていた。大波が一本の樺の枝を

私のもとに運んできた。そして 心が痛んだのは、

かつてどのように アルウインの樺の木の下で

白髪の父フィン の傍らに立ち か細い蝙蝠の鳴き声を

聞いたのかを 私が思い出したからだ。

そして そうすると 若いニイアブが、

あの馬を引いてきて、悲しそうに 私の名を呼んだ。

私も馬に跨った。そして ただ漂うばかりの灰色のなかを

私達は馬の歩みを進めた。その荒れ模様

遙かに続く単調さは、 風と海の響<sup>まぎ</sup>めきに

紛<sup>まぎ</sup>わんばかりにと 溶け合っていた。

「私には 自分の魂が 朽ち落ちていくのが聞こえる。

石と石とを重ねた マナナンの暗い塔に

海のぬめりがこびり付き 海の方に倒れていくのも。

そして 全てのもが滅びるのだといって、

月が 昼も夜も 海を悩ませるのが、聞こえてくる。

だが、月が 全てのを飲みこむまで、私は

この空の下の 最も力強い者達に戦いを挑むのだ。

いつの時も その者達は 倒れて、逃げていったではないか。

人間の愛は当てにならぬが、その怒りはもつと当てにならぬ。

人間の覚悟とは さすらい 消え去るものなのか。」

それから 放心したようにニアムは呟いた「さあ これから

「忘却の島」へと向かいましょう、ごらんささい！

「舞踊と勝利の島」は もう威力がありません。」

「して、この島々のどれが

「満足の島」なのか？」

「知る人はおりません。」と彼女は云って、

彼女の泣きぬれる顔を 私の胸に預けた。

### 三 の 書

その足元に泡が飛び、鞍帯の高さに達するほど周りに漂う

乳白色の水煙が、私達の視界から 潮の面おもてを見えなくしていた。

すると、あの逃げる者とそれを追う者が、青白い泡の彼方から現れた。

彼等の顔に浮ぶ不死の者の抱く不死なる欲望を見て、私達には溜息が漏れた。

フィニアン達とブラン、スキョーラン、ロメエアとの狩の事を 私は黙想していた。

ニイアプの方はけして歌をうたうこともなく、いまや 私の指先に触れたのは、

滑り落ちる涙と 霧で冷たくなって はらりと落ちた彼女の髪の毛であった。

そして いま 温かい溜息が漏れたかと思うと 次に その唇が戦慄わななした。

気味悪い静寂のなかを揺られていくと、露落とす榛と檜の木が生える

平らな島が目の前であった。どれほどの日と時間を 私達は騎乗したのだろうか？ 私達は海辺らしきところで止まった。新たに濯すすがれた羊毛より白い泡が足元に飛び、周りに乳白色の水煙が漂っていたのである。

それから 私達は海辺の平地を辿った。海辺は荒漠として灰色であり、灰色の砂が 緑の草地と露を落としている木々に 降り掛かっていた。露を落とし 陸地のほうに曲がった木々の 逃げ去るような姿は、海の呻き声から休息を乞い願う 大勢の老人さながらであった。

しかし 木々はより高い群落となり、その幹は大きな皺となっていた。滴り、仄かな滴りがあった。古から続く沈黙と その滴りの音だけが。というのも 生き物はおらず、その間には馳いたさえ動くこともなかった。下の地面からぶくぶく水音がしたので、私達は長い安堵の溜息をついた。

それから この虚ろな夜のなかで 馬がその耳を後ろに伏せた。それは ゆっくりと溺れていく水夫から この世と太陽の輝きが遠ざかるように、私達の手と顔や、榛や櫂の葉の上にも 光りが届かなくなったからである。頭上の星々もその姿を消し 世界全体が一つのようになった。

すると 馬が嘶いた。というのは榛と櫂の枝に邪魔されていたが、



馬の蹄の下には くだらかな谷間が広がっていた。星明りと影に紛れて、長い草のなかに微睡んでいたのは、巨大な人々であった。行く手には、そのてかる裸体が 溢れんばかりに重なり合っていたのだ。

そして 彼等のそばには 弓矢と戦斧、矢と盾と刃、それと

露で白くなった数本の角笛があった。その膨らんだところは 三歳の子供が 籐の寝椅子で寝ることができるほど広く、なか全体も象眼になっていた。

その出来栄えといえは、人間が銅や銀や金で作るより見事なものであった。

巨大な白いこの生き物それぞれは 人間を八十人分合わせたより大きく、耳の先端には羽毛が生えていて、その手は鳥の鉤爪になっていた。

その体は 長く戦がないために凝乳よりも真っ白くなり、

その吐く息で 切り立った谷に生える 葉や草の房を揺らしていた。

彼等の頭上の森はあまりにも宏大であり、その門徒として星を束ねる神も、

自身の露を含む空から離れなくても、指で木の葉を愛撫できるほどであった。

その髪の中で幾羽もの鼻が鼻を作るほどに、かくも長く彼等は寝入っていたので、幾世代にも渡る鼻の眼が 腫げな毛のなかに いくつも光っていた。

数羽の鼻が 彼等の手足と谷を越えてゆつくりと迷い込んできた。

いまは 星明りの中かとおもうと 次には 影の広がるところを飛翔した。  
巨大な白い生き物の長の者が、その膝を柔らかな星の光に晒しながら、  
影になったところに 打ち寛いでいた。私達は彼の傍で手綱を引いた。

薄暗い地面にぞんざいに投げ出された その鳥の鉤爪は黄金色であった。

老人の胸に秘められた溜息よりも たくさんの鐘が 一本の枝に

吊るされていて 柔らかく耀いていた。羽を打ち振り 飛び群れる梟が

彼の方へとその体をにじり寄せると、闇中に その眼という眼が煌めいた。

私の視線は その数多くの眠る人に注がれた。この世が始まって以来、  
なかつたのだ。多くの美しい者達のところにも、悪鬼が使う妖術によつても、  
こんなに美しい顔をした者が 涙する人間の目に知られることは。ただ、  
七重の海が若い時分に 情熱が消え失せ 疲れた顔立ちの者達であつたが。

私は 語部に長く詠われてきた眠りの因となる鐘の枝をじつと眺めた。

深草に野営するこの微睡む人達が 広い世界との戦いに草臥れ、

さ迷える海の岸辺を歩いた果てに疲れ切つて、その鐘の枝に手をかけて

それを揺すり、人間のものでない眠りを貪っているさまを 私は見たのだ。

ニイアブから角笛を急ぎ取りあげて、私は長くたゆたう一節を吹いた。

すると あの奇怪な眠る人達は 羽虫が涌き立つような音を立てた。  
その長は 丸めた唇を震わせ、柱のような喉を伸ばし、その眼窩に  
悲しみの籠った不思議な様子を浮かべて 私達を打ち眺めたのである。

私は叫んだ、「その影の中から出てくるのだ、黄金の爪をした王よ！

そなたのよき家柄のこと そなたのよき腕前のことを語るのだ。

さすれば 我等は星明りに黙想し、古の戦のことを語ることが出来ようぞ。  
かく訊ねるアシーンは卑しき者にあらず、フィニアの国から参上した。」

私を見据える半眼となったその目は 夢の余煙でどんよりとしていた。

唇が答えようとしてゆつくりと動いた。が、そこから答えは出てこなかった。

それから 彼は指で鐘の枝を揺ると、四月の雪の薄片より柔らかく

炎のように髓を貫く音が、ゆつくりと幽うすかな流れとなって零れてきた。

地上のものより気だるい その楽の音の波に包まれて、私が嘗なめた

長年の辛酸の記憶が蘇よみがえった。そして海水に覆われる石のように

私のすべての悲しみと歓喜の記憶が ことごとく消えていき、

柔らかな星明りによって 私は骨の髓まで満されたのである。

カタバミの草の根元に、私は体を低くして 横になった。

真珠色のニイアブが 私の胸の上に額をあて、傍に横たわった。

馬は遠くに行つてしまい、何年もの月日が流れ始めた。

四角い蒿の葉が 私達の上に這い伸び、巻きついて休息へと誘<sup>いざな</sup>った。

幾本もの白い笏杖を持つ人よ、その百年の間に 私は 戦で倒される者が次々と転がり落ちるときに、どのように 馬の毛爪が 血を滴らせたのか、鷺のいる葦原で どのように 鷹匠が鷹の後を追うのかも 忘れてしまい、その金槌で コノハー王の古の刃を作った鬼匠<sup>(二十五)</sup>の名前も 忘れたのだ。

幾本もの白い笏杖を持つ人よ、その百年の間に 私は、槍の柄が 砦の木から、そして 楯は 柳の木と皮から作られることや、どのように 金槌が 焼けた槍の穂先に乗せた金床の上で 跳ねることも、フィンの歩みの鈍い碧眼の雄牛が 夕潮に低く鳴くのかも 忘れたのだ。

だが、柔和な笏杖の人よ、夢のなかで 仲間して砂塵を上げながら、私の周りに動き回る海と陸の者達は いずれも冬物語に出て来るような面々であった。私のもとに来たのは 豪快に笑い歌う赤枝騎士団の王達。愛を語ったり 船で嵐のなかを突き進んだりするのは 昔の振舞いさながら。

来たのは、プラニッド、マック・ネッサ、古の宴にそつと訪れた長身のファーガス。

裏切り者の料理番バロク、さらに 戦のとき、乾く間もなくその髭に唾を落とした  
闇のバーラー。森ほどに老いており、大きな頭を甲斐なく垂らし 戦車に乗せられ、  
疲れても死をもたらすその眼の瞼を 下臣のものがこじ開けたという男。<sup>(二一六)</sup>

私のそばに 柔らかな赤装束のフィニアン達が、奔流のごとくにやって来た。  
微笑みながら歩くグローニア<sup>(二一七)</sup>は 骨の針で縫い物をしていた。

夢のなかの者達と 私はそのように暮らし暮らさずに、成すようで成さずに、  
魚が水中で石のように無言で泳ぐように 長く硬い眠りについていた。

時折、私達の眠りが浅くなった。太陽が金色か銀色に彩られるときや、  
鼻が翼を羽ばたかせ、暗がりのなかを飛び行かんとするとき、  
土蚩<sup>(二一八)</sup>が 塚の塹<sup>(二一九)</sup>から誘われて、草の葉の上で青く光るときに。

半ば寝覚めた私達は瞼を開き、一つ溜息をついて、あの草地をじつと眺めやった。

そう眺めていると、笏杖の人よ、その百年が経ち、遙か彼方の空の只中から、  
その草地の只中に 弱った一羽の椋鳥<sup>(二二〇)</sup>が落ちてきた。フィニアン達が  
朝に 獵犬プラン、スキョーランとロメエアを嗾<sup>(二二一)</sup>けるときに、  
貝のように白く照り出す月の下に集結する 彼等にも似た一羽の鳥が。

私は目覚めた。あの不思議な馬が 呼びもしないのに 遠くから駆けてきて、

私の肩にその鼻面を擦りつけた。馬は その深い胸のなかで 察したのだ。私の胸に人間の昔の悲しみが再び湧き起こって、私がこの不死の者達や、この朧げな地や、この露滴る眠りから抜け出すつもりだということを。

おお おぬしが 美しいニイアブが 清水のように青白くなるのを見たならば、笏杖を持つ君主よ、おぬしは両手を上げて 泣いたことであろう。

だが 黄昏と微睡みの喜びが失せたことをただ思い出すばかりで、この指にあの鳥をそつと掴かんで、私が騎乗すると、馬の蹄は苛立たしい音を立てた。

私は叫んだ「おお 色白のニイアブよ！ ほんの十二時間でよいから、私は父フィンの髭面が見たいのだ。フィニアンの編垣の住居で

老若の者がチェス板に身を屈めて興じているところに 行きたいのだ。

ああ いまや 私には 禿げ頭のコナンの悪口ですらも 甘美に思える！

私はさながら 長い櫓を漕ぐ友のことを思い浮かべ、帆も擦り切れて 檻ぼろ褌ぼろとなつて 遙か南の島に打ち捨てられた ガレー船のようだ。

もはや 長い櫓で洋上をゆつたりと幾マイルも行くどころか、

虫が飛び交い 藜草はびこと蒲の蔓延る真つ只中はびこにいるようなものよ。」

不思議な思いで気分も和んで 巨人達はその眼をじつと凝らして、

谷間にちらつく光の帯のなかに その滑らかな顔で ニイアプを見やったとき、彼女は呟いた「ああ さ迷うアシーンよ、鐘の木の魔力はなくなりました。あなたの指に 地上の揺らめく悲しみが 活きづいていますから。

ですから 鞍に跨って 島々を通り抜け、生者達の様子をご覧になって、潮の波頭を越えて 早くあなたのニイアプのもとへ 戻って来て下さい。

でも このニイアプのために泣いて、ああ アシーン、泣いて下さるわね。

靴が子鼠ほどの小石に軽く触れるだけで 私の元には戻れなくなるのですよ。

ああ 燃え盛る獅子のようなあなた、ああ いつになったら休息なされるの？ 私には 遠く鞍上からも、陸で彼女が嘆いているのが 分かった。

「私は 秋の小さな枯葉のように 死んでしまいたい。私達はもはや

胸と胸を合わせることも、その甘美な視線を熱く交わすこともないのだから。

遙か遠い海に浮かぶこの島々は 精霊だけがやって来るところ。

ここでは 吹く風は 巢で眠る鳩の吐息よりも、星の輝きと潮の香に紛れて聞こえてくる 微かな海鳴りの音よりも、穏やかではありませんでしたか？

ああ 燃え盛る獅子のようなあなた、ああ いつになったら休息なされるの？」

その嘆きの声が 遠くなった。あの萎びた樹皮の森のそばを 私は馬で通った。

そこには絶えず仄かな滴り、古から続く沈黙と その滴りの音だけがあった。

というのは 生き物はおらず、その間には馳さえも動くこともなかった。  
ぶくぶく音のする地面は あらゆる事を忘れさせる幻影に覆われていた。

それから 私はすべてが荒漠とした灰色の あの海辺の平地を行った。

灰色の砂が 緑の草地と露を落としている木々に 降り掛かっていた。

露を落とし 陸地のほうに曲がった木々の 逃げ去るような姿は、  
海の呻き声からの休息を乞い願う 大勢の老人のようであった。

そして 風が海辺の砂をくるくる巻き上げているときであった。

私の心に フィニアン達の名前が巻き上がってきた。あの榛と樗も早や過ぎて、  
私の馬は大波に乗って進んだ。その足元では 鞍頭に達するほど高く

潮の泡が飛び、漂う乳白色の水煙が 周りを取り囲んでいた。

私の周りでは泡の薄片が飛び去り 風が海原から吹きつけて、いつの間にか

あの鳥を攫<sup>さら</sup>っていった。泡と風に取り巻かれ、しっかりと鋌<sup>さ</sup>打ちされた  
鎧のような着物が氷のように冷たくなったのにも 気づかなかった。

「思い出」が、その細身の体を起し 私の心の入口で泣き叫んだからだ。

そのとき 朝の風に混じって、新しく刈られた干草の匂いがしてきた。



私は首を落とすと、ペリーののような涙がはらはらと落ちた。

次に、遙か彼方の海辺の音に半ば混じって、一つの音が聞こえてきた、大きな野雁の鳴き声だ。そのあとで、磯に生える茶色の海草が見えてきた。

もしかつての私であるならば、咳き込んで頭を膝にのせて祈ったり、教会の鐘に激怒することはないだろう。硬い蹄で砂と貝を蹴散らして、愛の歌を口遊み、暁の訪れのように海から馳せ参じた。その私であるならば、ラックリンからペラの港までの<sup>(二十九)</sup>すべての聖人の首を刎ねてやるつもりだ。

たぎり立つ大浪を切り開いて、私は馬道へと乗り入れてみた。

大変に驚いたのは、いたるところで、編垣や木で建てられた

おぬしの鐘楼の聳える教会や、見張りがいない神聖なケルンや砦や、鶴嘴や鋤を手にして<sup>うずくま</sup>蹲る弱々しい小さな人々を、目にしたときだった。

あるいは、重労働のために汗で光った顔をし、草取りや耕作をしている人々を。

そして、あちこちで、さえない体をした首領が、笏杖を持つ人よ、おぬしの網に囚われて、寝床での詰まらぬ死を気長に待っているのを、目にしたときだ。

私の口からは、森に吹く風の咆哮のような嘲笑がついて出た。

そして、大柄な体躯の私が目を輝かせ、大急ぎで彼等の傍に行かぬはなから、

若者やふと頭を上げた老人の鋭い視線が追ってきた。馬を先々へと進めながら、私は叫んだ。「フィニアン達は夜に狼狩をする。昼間は寝てるがよい。」ある声がかう叫んだ。「フィニアン達は だいぶ前に 死んだのだ。」

枯草のように痩せた顔をした白い髭の者が 黙って小道に立っていた。

目と口の皺のなかには、乳のない子供のような悲しみがあつた。

島々を巡つた夢も消えうせ、獵犬と馬と恋、そして絹のように輝く眼と共に、どのように 人々が悲しみ死んでいったか 私には解つたのだ。

その髪で顔を隠し 私は呟いた。「はるか昔に、彼等は逝つてしまつたのだ。」

私の涙は ベリーよりも大きかつた。「クレプロか広いノックフェインの頭上の

白雲<sup>三十一</sup>広がる神々の床の上で 彼等は昔の大勢の者と宴をしているのだ。」

と私が呟くと、彼は叫んだ。「いや、その神々も だいぶ前に 死んだのだ。」

ニイアブのことが独り恋しくなつて、私は身震いし 辺りを見回した。

私の心は 彼女の心のなかに 飛蝗<sup>ばつた</sup>のように飛び込みたいと願つた。

私は馬を戻し西の方へ向かい、懐かしい海鳴りを辿つていくと

星明りなか 真夜中のころに メイブ女王が眠る場所が 見えてきた。

そして あの山麓でのことだ。二人の者が 砂が一杯詰まつた袋を運んでいて、

汗を流しながら運ぶ途中によるめき、ついに重さに耐えかねて転んでしまった。宝飾された鞍から身を乗り出し、私は手でそれを五ヤードほど抛ってやった。かくも弱くなった人間と フィニアンの昔の強力を咽むせびながら。

残りはお聞き及びのこと。おお、笏杖の人よ、腹帯が切れて、どのように私が路の上に落ちたかを、あの馬が夏の羽虫のように立ち去ってしまったのかを。そして 三百年が私に降りかかったことを。私が立ち上がって、土の上を歩き、髭に乾くこともなく唾を垂らし、眠気ばかりの這いずる老人となったことを。

どのように あの砂袋の者達が 空に聳える鐘樓の教会を 私に見せたのかを。私の腫げな眼に残る光る戦斧の一撃ではなく 笏杖が光る寂しい所を。

キールタとコナンやブラン、スキョーラン、ロメエアはどこにいるのだ？  
話して下さい。おぬしも思い出に古い 夢に取り巻かれる老人なのだから。

**聖バトリック** 足裏の肉が 燃え盛る石にへばりつくところに 彼等はいるので。  
悪鬼が広い地獄の燃え盛る石の上で 彼等を鉄線の鞭で打ち据えている所だ。  
祝福された者が彼方に去り行くのを、また神の御顔の微笑を頼み観る所だ。  
その間には真鍮の扉があり、号叫する墮天使達がいるばかり。

**アシーン** 私の手にその杖を下され。尊者よ、私はフィニアン達のもとへ参って、

昔に彼等を奮い立たせた戦の歌をうたうのだ。彼等は立ち上がって、息で雲をなし、歡喜して、幾度となく唱和するだろう。その足元の土は喘ぎ、悪鬼らはばらばらに裂け、きつと死ぬまで踏みつけられよう。

悪鬼らは暗闇が怖くなり、眼と翼に深い恐怖が走り、恐る恐る耳を地面につけ、立ち上がって、泣くことになろう。

私達が叫び嘲笑し突進するときには、楯が震え、張り詰めた弓の弦が、小刻みに震える音が、聞こえるのだ。地獄が囁きで高鳴るのが聞こえるのだ。

私達は、燃え盛る敷石を砕き、真鍮の門を打ち破って、なかに進入する。勇ましく武装した賓客がそこに入るとき、誰も「いや」とは云えぬ。

箒で掃くように見事に平らげて、牡牛が青い草地を行くように進軍するのだ。それから、宴を開き、数多の戦や古に受けた傷の話をし、休息につくのだ。

**聖バトリック** 燃え盛る敷石に、逃れられず、フィニアン達の五体は抛ほうられておる。

世界をその怒りで破壊できる地獄の主ぬじ達に、戦いを挑む者などおらぬわ。

だから、敷石を擦るよう跪いて祈るのだ。青春の頃の悪霊への愛によって、その無神と熱情の歳月によって、失われてしまったお前の魂のために。

**アシーン** ああ、この身には！ 咳に震え、老齡と苦痛に弱り果て、

笑いもなく、子孫への恥となり、ただ追憶と恐怖があるばかり。  
 すべての緋のような時は失せてしまい 雨に打たれた乞食の外套か、  
 激雨に濡れる干草の山か、梁やなに吸い込まれる狼のようなありさまよ。  
 神に祝福された人だけを眺めて 昔愛した人がそこにはいないのは辛いことだ。  
 私は この身に残る命が潰えるとき この小石の数珠なぞ捨てしまおう！  
 私は キールタとコナン、ブラン、スキョーラン、ロメエアのもとに行つて、  
 炎にしようと宴にしようと フィニアン達と その館で暮らすのだ。

(原 注)

この詩は、聖パトリックとアシーンとの中世アイルランド語による対話と、前世紀「十八世紀」に作られたあるゲール語の詩に基づいている。描かれている事件については、この書物所載の多くの詩における事件と同様に、ある特定の世紀というよりも、多くの時期に渡って作られ、いくつかの民話によつて描かれてきたものなので、不特定の時期に起こったものと考えられる。それゆえ、後のフィニアンの物語自体と同様に、この詩には中世的なもの、古代のもの両方が多く混在している。ゲール語の詩では、アシーンは一つの島以上には行くことはないのであるが、『シルヴァ・ガデリカ』『ゲールの森』のある話には、北方の島、西方の島、南方の島、東方にあるアダムの楽園の「四つの楽園」が描かれている。——一九一二。

(訳 注)

この物語詩は、イエイツの注で述べられているように、アイルランドの古代英雄伝説に登場する、勇猛なフィアンナ騎士団を率いて大活躍する頭領フィンの息子で、英雄・詩人であるアシーンと、アイルランドをキリスト教化した功で、アイルランドの守護聖人に奉られている聖パトリックとの対話という体裁をとっている。

なお、訳出にあたって使用したテキストは、マクミラン (Macmillan) 社の『W・B・イエイツ詩集』(The Collected Poems of W. B. Yeats, 1969) による。

- (一) キールタはフィンのお気に入りの戦士であり、アシーンの親友。俊足で知られる。コナンは大言壮語で名高いフィニアン  
の戦士の一人。
- (二) フィンが飼っている猟犬。
- (三) 先史時代にアイルランドに侵入したという種族。次にやって来たダーナ神族(九の注参照)に敗れる。
- (四) 赤枝騎士団の物語群に出てくる高名な女王。
- (五) イエイツにおいては、「角のない鹿」は「女の情欲」を、(この後に出てくるが)この鹿を追いかける。「片方の耳が赤い猟  
犬」は「男の情欲」を象徴する。フィン物語群では、フィンは神ドウンの変化である鹿を狩る。フィンの妻の妖精サイヴァ  
はドルイドによって鹿にされ、彼等の間に生まれた息子アシーンは、しばしば半分鹿、半分人間と見なされる。アシー  
ンとは「小鹿」の意。
- (六) アシーンの息子であり、ガウラ(次注)の戦いで戦死した。
- (七) フィアンナ騎士団は、紀元二八四年にダブリンの北方にあるこの戦場で一掃される。
- (八) アンガスは、アシーンがニイアブと旅する第一の島「青春の国」(ティル・ナ・ノーグ)を支配する愛と美の詩の神。ア  
ンガスの接吻は鳥となって、その頭の周りを飛ぶといわれる。
- エードンは妖精の王ミールの妻。王の先妻の嫉妬をかい、虻に変えられるがアンガスに助けられる。イエイツは、エード  
ンはアンガスとの間にニイアブを儲けたとする。
- (九) ダーナ神族(ツアーハ・デ・ダナン)は邪悪なフォモーレ族を倒し、アイルランドの黄金時代を築いたという神々。女  
神ダナの種族の意。イエイツの説明によると、アイルランドのすべての古代の神々の母とされる神族。

- (十) 榛と共にアイルランドでは神聖な木とされている。「青春の国」では常にたわわに実をつけている。イエイツの詩、「The Song of Wandering Aengus」では、永遠を求めてちすらう旅を象徴する。
- (十一) もとダナン族の王達が集まった大広間があった丘。その後、フィン王の本拠となった。
- (一二) キリスト教伝播以前の古代ケルトの宗教であるドルイド教の司祭。宗教のほか魔術や裁判や教育、病気の治癒にも当たった。
- (十三) タカ科、体長五、六十センチの猛禽。ここでは「悲しみ」のことを表し、その原因である「時」に関係する。
- (十四) 聖パトリックのこと。
- (十五) R・エルマンによると、この二体の像について、一体は「星」に、もう一体は「波」に関連しており、アシーンをこの場に送ったということは、英雄である主人公アシーンが、理想（「星」と現実（「海」）の世界の間に、その行く道を捜さなければならぬということ暗示している。(The Identity of Yeats, p.19)
- (十六) ダーナ神族の知恵の木である九本の榛の木と同じものとされる。イエイツは「かつてアイルランドの中央に、七本の神聖な榛の木がその影を落とす井戸があった。ある女性がその実を摘むと、七本の川がその地から湧き上がって、彼女を流し去った。私の詩においては、この井戸は、七重になっているこの世界の水の源泉となる。」という注をつけている（一八九五）。
- (十七) エイは死の神。その竖琴の演奏を聴くものは皆死ぬという。
- (十八) スペインからアイルランドに進攻しダナン族を破り、今のアイルランド人の祖先となった伝説の王ミレシウスの息子の一人。
- (十九) 「鷓」は束縛のない空間における自由の象徴。(例えば、後に書かれるイエイツの詩「On a Political Prisoners」などを参照)
- (二十) 先ほどの捕らわれの女性のこと。
- (二十一) アイルランドで用いられた古代のアルファベット文字。二十文字で右によく刻まれた。

- (二十二) 無限の大洋であるリアの息子、海の神。海の向こう(か下)にある「常若の国」と「死者の国」の支配者。マナナーンは二振りの有名な刀を持っていた。
- (二十三) キリストの顔のこと。
- (二十四) 「揺さぶるとすべての人を、健やかな眠りにつかせる伝説上の杖」とイエイツは説明している。
- (二十五) 鍛冶屋クランのこと。アルスター王であるコノハーの刀と槍と盾を作った。英雄クフリーンの養父。
- (二十六) この連に先ず登場する、ブラニッドはマンスター王の妻。戦功として連れ去られるが、愛するクフリーンと謀ってその相手を殺し、自もその復讐に倒れる。
- マック・ネツサは、アルスターの王であるコノハーのこと。
- バロクはファーガス(赤枝騎士団の王で英雄、デアドラとウシュナの息子達の護衛者)を宴会に招く。その隙にウシュナの息子達は殺される。
- ファーガスは赤枝騎士団の王。「彼「ファーガス」は、アシーンがフィンアンの詩人であったように、赤枝騎士団の詩人であった。」(イエイツ注) ファーガスは招かれた宴会は断らないという誓い(geas)を立てていた。
- バーラーはフォモーレ族の王。闇の軍勢の長。頭の前後に目が一つずつあって、片方の目の視線を浴びた者は絶命するので、その眼を閉じることを条件に生きることが許される。ダナン族との戦いでは、部下のものがその目をこじ開けて、相手を殺したとされる。
- (二十七) グローニャは大王の娘であったが、年老いた婚約者のフィンを嫌い、若い恋人ディアミッドと駆け落ちする。長年に渡る追走のはてに、ディアミッドは殺され、グローニアは不承不承フィン王妃となる。
- (二十八) ここでは、この椋鳥は「現実」を表すものであり、アシーンはその羽ばたきによって地上の悲しみに目覚めるのである。
- (二十九) ラックリンは北のアントリム州の沖に浮かぶ島、一方、ベラは南のコーク州のバントリー湾にある島で、これでアイルランド全島という意味になる。



(三十)

クレプロは赤枝騎士団の住んだ建物。ノックフェインはマンスタールにある丘で、妖精達の本拠とされる地。

(五六)